

Title	＜翻訳＞オルコヴリの話
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 36 p.61-p.76
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80583
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

オルコヴリの話

菅 原 邦 城 訳注・解説

OLKOFRA ÞÁTTIR

Translated from the Old Icelandic with an introduction and notes

by Kunishiro SUGAWARA

Preface

This is presumably the first Japanese translation of an old Icelandic comic satire, *Qlkofra þáttir*, i. e. Tale of Ale-Hood. The original Old Icelandic text used for this translation is that of *Möðruvallabók* (c. 1340) edited by Jón Jóhannesson, *Íslensk fornrit* vol. XI, Reykjavík 1950. In the introduction this tale is explained from some literary viewpoints, and the technical term *þáttir* discussed mainly in its correlation with another term *saga*. The notes are added in details, so that it would be less difficult for the Japanese reader to understand the ancient society of Iceland as well as her geography described in this short story.

August 1975

K. S.

解 説

I. Qlkofra þáttir

この作品は、*Bandamanna saga* を除けば¹、アイスランド古典文学中ほとんど唯一の喜劇的風刺作である。

登場人物のうち、事件の発端となる失火を起した Þorhallr qlkofri 以外は、訳文の注記からも判るように、すべてその実在の確証できる人物であり、〈学者〉アリの『アイスランドの書』や多くのサガにおいて、「法令改正にもっとも熱心であった」、「最大の法律家」、「法律に精通していた」、「賢明な」、「人望厚い豪族」で「権力者」だといわれる有力者である。それに対して、主人公オルコヴリは、大民会でビールを商って家計の足しにしなければならない水呑み百姓ともい

1. Cf. W. P. Ker: *Epic and Romance*, N. Y.: Dover ed. 1957, p. 226; Stefán Einarsson: *A History of Icelandic Literature*, N. Y. 1957, p. 143.

うべき、普通ならば、とても豪族と対等にはなれない者である。また、事実上のヒーローたるブロッディは、——原文のニュアンスでは——まだ一人前に扱われない青年である。物語のポイントは、この水呑み百姓と若者によって、思慮深く用意周到な——むしろ、孤の知恵をもつ——豪族、権威者たちがペテンにはめられ、翻弄されることである。それをより効果的にするためには、両者間のコントラストが大きければ大きい程よい。したがって、首領たちとは「人物としての違いが」(Ⅲ章)ある最下層の水呑み百姓を主人公にし、ブロッディを他の資料から推測されるよりも若く思わせるフィクションは、作者の才能の並々ならぬことを示している。

本作に語られている出来事があったと設定されている時期(1010—20年頃)に、登場している豪族が全員生きていて、同様に活躍していたとは考えられない²。先ず、入植者〈赤鉄鉱〉ビョルン(9世紀後半)の息子である〈ひだ飾り〉ソルケルが11世紀になる頃は間違いなく死亡していた。エイヨールヴは、ブロッディの祖父(974年歿)と同世代であり、1000年前後に「キリスト教がアイスランドに到来したとき、その老年に洗礼を受けた」³と伝えられているから、彼も上のソルケル同様であつたろう。ブロッディとほぼ同じか少し年長なのはソルケル・ハルルソンだけで、残りは更に一つ前の世代に属する。サガ作者と時代を同じくする読者や聴き手が、物語の記述や描写から、それが史実であるとの印象を受けることを作者が望んだろうことは⁴、想像にかたくないが、そうだからといって、物語に現われる史的人物や事件をあまりにも文字通り受取ることは、現代の読者は注意しなければならない。

本作では、常識には賢明で公平とされる豪族を出来るだけ多く挙げて、その貪欲ぶりをより一層効果的に風刺しているのであって、決して、これは作者が昔の人物たちについて疎かったためだと解釈すべきではなかろう。仮にそうであったとしても、この作法はフィクションとしてはプラスになっている。この観点からすれば、ブロッディがゴズィたちを相手に並べたてている不名誉な事件も、たとえ他の資料から知られていないにせよ、作品鑑賞上は、そのきわめて効果的な役割に注目すべきである。

その成立に関して、「オルコヴリ」は、とくに *Vápnfirðinga saga* と *Ljósvetninga saga* と関係があり、*Bandmanna saga* に影響を与えているとも考えられる。しかし、それを正確に決定することは困難である。(詳しくは、Jón Jóhannesson の解説等を参照されたい。)ここでは、一つの題材について触れるに留める。

Ⅲ章後半におけるブロッディと豪族たちとのやりとりを一読すると、読者は直ちに、エッダ詩の *Lokasenna* 「ロキの口論」⁵を想起さざるを得ない。そこでは、神々は辛うじてロキの難くせ

2. Jón Jóhannesson: Formáli § 4 in *Íslenzk fornrit XI*, Reykjavík 1950.

3. Ari inn fróði: *Íslendingabók* (= ÍF I), Rvík 1968, p. 28.

4. Sigurður Nordal: The historical element in the Icelandic Family Sagas, in *Scripta Islandica* 10, Uppsala 1959, p. 20.

5. 邦訳あり。松谷健二訳『中世文学集』(筑摩書房、昭和41)、13-17頁所収; 谷口幸男訳『エッダ』(新潮社、昭和48)、80-88頁所収。

に対して言い返しているが、我々のゴズィたちはブロッディに反論さえも出来ずにいる。この沈黙はきわめて有効であり、前述のように、ブロッディの非難の多くが作者のフィクションであったとしても、それは作法上欠くべからざるものである。(なお、*Njáls saga*, ch. 119 に見られる Skarphedinn のゴズィ非難も、ブロッディのそれに似ている。)

1250年頃に「オルコヴリ」をまとめたと推定されている作者は、一体に、独立時代(1262—42年以前)の法律に通じ、民会広原や北部地方の地理にも精しい学識者のようである。上層の出身であろうが、その時代(Sturlungaöld)の最大の悪ともいうべき権力濫用・悪用に批判的である。その文体は無駄が少なく、この点では *Hrafnkels saga*⁶ の作者と並ぶ。

拙訳の底本は、Íslenzk fornrit XI: *Austfirðinga sǫgur*. Jón Jóhannesson gáf út. Reykjavík 1950, pp. 83–94 のテキストで、これは、〈メズルヴェトリル本〉Möðruvallabók (AM 132, fol.; 1340年頃)に含まれる現存最良の伝本である。

II. þáttir —saga との関係において—

中世アイスランド散文学の一ジャンルを指す用語に、*þáttir* m. (pl. *þættir*; <Gmc **pahtu*; cf. Swed. *tott*, Dan. *tot*, G. *Docht*)がある、これは、「紉、よった糸、縄」などを意味し、更には「全体的一部分」を表わす。文学用語としての *þáttir* の概念は、おおよそ次のように言える¹。すなわち、短い散文で、独立のものとして書かれた物語(S. Nordal の言では, *sjálfstæð skráð frásögn*)。

Íslenzk fornrit 所収の作品を見ると、*þáttir* と呼ばれるものは、僅か2ページから10数ページの量で、きわめて短い。しかし、散文の主要ジャンルたる *saga* と比べれば、文体の点でこれと基本的に相違するものでないことが判る。しかし、後者と大きく異なって、これらの短篇は主人公の生涯のごく限られた一部、一事件を主題とし、またその内容は作者の好みと人生観によって、種々様々である。*þættir* を書くことはきわめて長期に亘って(14世紀まで)行われ、後にはしばしば、大なり小なり半独立的な内容のまま、サガ作品の中に挿入されており、これから、*þættir* は *Konungasögur* 〈王のサガ〉や *Íslendingasögur* 〈アイスランド人のサガ〉と近い位置にあるといえる。Sigurður Nordal (1886–1974)² によれば、*þættir* の多くは〈王のサガ〉著作の隆盛期につながり、最初期の作品は〈アイスランド人のサガ〉よりも古く、これの成立に影響

6. 邦訳あり。拙訳『大阪外国語大学学報』No. 21 (1969), pp. 135–149, No. 22 (1969 [1970]), pp. 125–145; 谷口幸男訳『形成』36号 (1972), pp. 73–95; 山室静訳『赤毛のエリク記』(冬樹社, 昭和49), pp. 111–150 所収。

1. Cf. 山室静『北欧文学の世界』二版(東海大学出版会, 昭和44), p. 135; S. Nordal: *Um íslenzkrar forn sögur*. Árni Björnsson þýddi. Rvík 1968, p. 125; Kurt Schier: *Sagaliteratur* (= Sammlung Metzler, Abt. D: M 78), Stuttgart 1970, p. 2.

2. 上掲書引用箇所。

しさえしているという。þættir をまとめて、〈王のサガ〉と〈アイスランド人のサガ〉とのいずれか一方のグループに組入れることは困難である。きわめて短かいために、きびきびとして無駄の少ない好篇も少なくなく、*Auðunar þáttir vestfirzka*³, *Hreiðar þáttir*, *Þorsteins þáttir stangarhøggs* などが傑作として挙げられよう。なお、サガ作品の比較的少ない東部地方から多くの þættir が知られている (ÍF XI に 7 篇が入っている)。

saga と þáttir は、その長さを別にすれば、用語使用上の区別、境界があいまいであり、たとえば *Qlkofra þáttir* は、伝本〈メズルヴェトリル本〉では、*saga* と呼ばれているのである。Nordal は上の引用箇所で、「若干の作品では、þáttir と *saga* とが交互に (á víxl) 用いられている」と書いている。果してそうであろうか。一見したところ、少くとも þáttir を *saga* に代用させる語法はないように思われる。その逆をみるために、ÍF 所収の þættir から例を挙げよう。説明を簡単にするため、物語の終了を告げる文、〈ここで／そこで...の物語は／を終る〉に現われる〈物語〉や〈物語ること〉を意味する語句を検討する。

þáttir: Ok lýkr hér þætti Gull-Ásu-Þórðar. (*Gull-Ásu-Þórðar þáttir*; ÍF XI, p. 349 [p. CXVI によれば、これは13世紀初期の作品])。Cleasby et al.: *Icel.-Eng. Dict.*; þáttir に他所からの例あり。

saga: Ok lýkr þar þessi sögu. (*Grænlandinga þáttir*; ÍF IV, p. 292), Ok lýkr hér sögu Gunnars... (*Gunnars þáttir Þiðbrandana*; ÍF XI, p. 332), Ok lýkr þar sögu Qlkofra. (*Qlkofra þáttir*; ibid., p. 94). さらに、

at segja frá: Ok lýkr þar segja frá Þorsteini... (*Þorsteins þáttir stangarhøggs*; ÍF XI, p. 79), Ok lýksk þar frá honum at segja. (*Þorsteins þáttir austfirðings*; ibid., p. 332), Og lýkr svó frá honum að segja. (*Jökuls þáttir Búasonar*; ÍF XIV, p. 59).

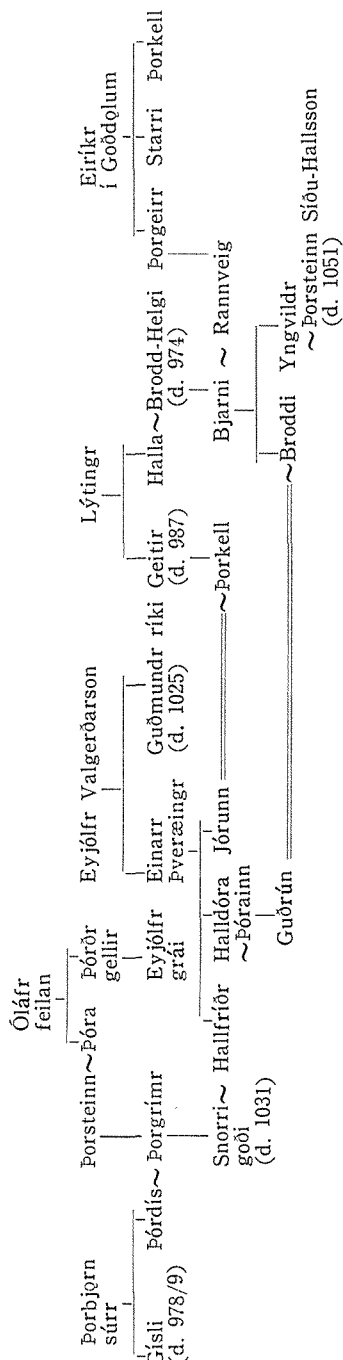
ævintýr (<OF *aventure* < Lat. *adventura*): Ok lýkr hér þessu ævintýri. (*Stúfs þáttir*; ÍF V, p. 290 [p. XCIV によれば13世紀前半(?)成立], *Lykðar þar þetta ævintýr*. (*Þorsteins þáttir sögufróða*; ÍF XI, p. 336 [p. CXIII によれば13世紀前半の作])。

詳論する紙数がないので、結論的にいえば、þættir にみられる語 *saga* の用法は、本訳の 3 箇所 (I 章冒頭、III 章と IV 章の末尾) の例にも見られるように、ジャンル表示用語としてではなく、語義通りの〈語られたもの〉(〈物語〉*frásögn* [←*segja frá*]) の意味であり、*saga* と同じ程に用いられている不定詞句 *at segja frá* の用法は、アイスランド人がいわば意識しないままに、このことを支持していると考えられる。一定の文学形式を指す語たる *þáttir* は、この *saga* の包括的な意味領域を持ち得ず、したがって *saga* にとって替られても、これにとって替えることは、ア・プリオリに無理なのである。(þáttir を文学用語として、たとえば現代語 *skáldsöguþáttur*

3. 邦訳：山室静訳『赤毛のエリク記』151-162 頁所収「白熊のオードン」また同氏の『北歐文学の世界』136-137 頁に *Þorsteins þáttir sögufróða* の訳、『赤毛のエリク記』163-220 頁に *Stúfs þáttir*, *Þorsteins þáttir tjaldstæðings*, *Þorhalls þáttir knapps*, *Brands þáttir orva*, *Þorsteins þáttir skelks*, *Qgmundar þáttir Dyttis*, *Þorsteins þáttir stangarhøggs* の訳がある。

「小説の一部分」という合成語に見られるように使えたとしても、この場合にももはや特定のジャンルを示す語とはならず、より一般的な意味しか持たざるを得ないのである。) 最後に、外来語 *ævintýr* (古くは *æfintýr*) は、南欧の騎士文学とともに13世紀初期に、ノルウェー宮廷を経てアイスランドに達した文学流行語であったと考えられる。

III. 「オルコヴリの話」関係系図



(参考資料: Íslenszk fornrit I, Rvík 1968; Ættaskrár VIII, IX b, XV, XVII b, XX, XXIII, XXX.)

I. ソールハッル (Þórhallr という名の男がいた。かれは黒ケ森⁽¹⁾ のソールハッル屋敷 (Þórhallsstaðir) に住んでいた。この物語^{サガ}の事件が起きたころ、裕福で幾分齢をとっていた。かれは小さく、見苦しかった。運動には巧みな男ではなかったが、鉄と木の細工に腕がたった。かれはその頃、金もうけに民会でビール⁽²⁾ を作ることを仕事にしていたが、このことで間もなく有力者みんなと話合える間になった。というのは、一番ビールを買ったのは彼らだから。よくあることだが、その時も、そのビールは評判がよくなく、売り手も同様という具合だった。ソールハッルは金づかいが荒いとは言えず、むしろけちだと考えられていた。かれはかすみ目をしていて、しばしば習慣のように頭巾をかぶり、民会ではいつもそうしていた。かれが有名な人物でないため、民会の参加者たちは、かれにくつつくことになった名前をつけて、オルコヴリ (Qlkofri「ビール頭巾」) と呼んだ。

ある秋、次のことが起きた。オルコヴリは自分の所有している林に行き、炭焼きをするつもりだった。彼はそうした。林はフラヴニ山⁽³⁾ の上手、ランガ坂⁽⁴⁾ の東にあった。かれはそこに数日いて、炭がまをこしらえ、それから木を焼いて夜に穴を見張っていた⁽⁵⁾。しかし夜が更けていくと、かれは寝入ってしまい、一方火は穴で燃え上り、まわりの小枝に飛び、間もなく盛んに燃えるようになった。それから火はその林に飛び移った。すると、これも燃え出した。そのとき風が強く勢いを増す。こうしているうちにオルコヴリは目をさまし、わが命の助かったことを喜ぶのだった。その火は林をかけまわった。先ず、オルコヴリの所有する林が焼けてしまったが、火はそれからその隣りにある林に移り、荒れ地にひろがる林を焼いた。そこは今スヴィズニング (Sviðningr「焼きやぶ」) と呼ばれている。そこで、ゴズィ林⁽⁶⁾ と呼ばれる林が焼けた。それは六名の主領 (ゴズィ) が所有していた。そのひとりスノッリ <ゴズィ>⁽⁷⁾、二人目はエイヨールヴの息子グズムンド⁽⁸⁾、三人目は <法の宣言者> スカプティ⁽⁹⁾、四人目はゲイティルの息子ソルケル⁽¹⁰⁾、五番目は <大吠え> ソールズの息子エイヨールヴ⁽¹¹⁾、六番目は <赤鉄鉾> ビョルンの息子 <ひだ飾り> ソルケル⁽¹²⁾ だった。その林をかれらは、民会で役立てようと買っていたのだった⁽¹³⁾。

この炭焼きの後、オルコヴリは家に帰った。この出来事は地区内にひろく拡まり、被害をうけた者たちのうち先ずスカプティに伝わった。かれは秋に、諸地方間を往来する者たちに托して北のエイヤフィヨルドに伝言を送り、グズムンドに、林の火事のことを言わせ、また儲けになることも語らせた。同じ伝言は西の地方に、林を所有していた者たちにもいった。このようにして、冬にかれら全員の間を伝言が往き来し、六名のゴズィは民会で会合して同一の方策を講じることになったが、スカプティは、いちばん近くに住んでいるので、訴訟の準備をすることにされた。春になって召喚の日⁽¹⁴⁾ が来ると、スカプティは大勢をつれて行き、オルコヴリを例の林の火災の件で召喚し、法益はく奪⁽¹⁵⁾ による処罰に相当すると言った。オルコヴリは乱暴な言葉をわめきたて、それどころか尊大な口をきいて、自分の支持者たちが民会に来たらスカプティは今ほどに大きな態度はとれないだろうと言った。スカプティはろくすっぽ答えもせず立ち去った。

次の夏、林を所有していた六名のゴズィが民会に出て来て、ただちにかれら同志で会合をひらき、この事件を訴えて高額の罰金を得るか一方的裁断権⁽¹⁶⁾を獲得するかどちらかにすると決められた。オルコヴリは民会に来て、売り物のビールを持っており、いつもビールを買ってくれる自分の友人たちに会いにいった。かれは彼らに支持を頼んで、売り物のビールを勧めた。しかし、かれらはみな異口同音に言った。自分たちは彼と割に合わない取引きをやらされてきたのに、かれが抱えこんでいるそのような権力者たちとの裁判事件で争って、わざわざその熊たちをけしかけはしないと⁽¹⁷⁾。誰もかれに援助を約束しようとせず、またかれと取引きしようとしなかった。それで、彼には問題が相当めんどうになってきたと思えるのだった。かれは〔民会〕小屋から小屋へと回ったが、人々に援助を頼んでも好ましい返事はもらえなかった。そのとき、かれの生意気も自尊心もしぼんでしまった。ある日のこと、オルコヴリはスィーザのハールの息子ソルスティン⁽¹⁸⁾の小屋に行き、かれの前にいて自分を援助してくれるようにと頼んだ。ソルスティンはかれに、他の者たちと同じような返事をした。

II. ビャルニの息子ブロッディ⁽¹⁾という男がいて、ソルスティンの身内だった。かれはソルスティンのとなりに坐っていた。この時、ブロッディは二十歳台だった。オルコヴリは、ソルスティンがかれに援助を断ると、小屋から出ていった。するとブロッディが言った、「兄さん、おれには、あの男が法益はく奪に相当するようには思えないし、自分をえらいと考えている者たちも、あれを罰するなんて器量の小さいことだ。兄さん、あれに援助してやることは男らしいことだよ、そうするのがいいとは思わないかい」

ソルスティンは答える、「そんなにしたらければ、お前があれを助けてやればいい。わしは、他のことと同様にその件でもお前を援助はしてやろう」

ブロッディはひとりの男に、オルコヴリを探してくるように言いつけた。男はそうして、出て行って小屋の壁のところでオルコヴリを見つけた。かれはそこに立ってひどく泣いていた。かれにこの男は小屋の中に入るように、そして泣きやむようにと言った——「ソルスティンのところに行ったら、めそめそ泣いてはならないぞ」

オルコヴリは泣くほどに嬉しくなり、実際かれは泣いたのだ。かれらがソルスティンの前に行くと、ブロッディが口を切った、「おれは思うのだが、ソルスティンはあんたを助けてやるつものようだし、これを言いがかり⁽²⁾と考えているのだ。自分のものである林をあんたが焼いたとき、あの人たちの林まで気をつけることは出来なかっただろう」

オルコヴリは言った、「今わしに話しているこの恵まれた御仁はだれですか」

「おれはブロッディという」と彼は言う。

するとオルコヴリが言った、「ここにはビャルニの息子のブロッディさんがおられるのですか」

「その通りだ」とブロッディは言う。

「あなたは」とオルコヴリが言った、「他の男たちよりも立派なお顔をしておられるし、そう

いう血統でもありますね」

彼はそのことについて並べたて、ことばが大胆になってきた。

「ブロッディよ、もしおまえがすすんで彼を助けるつもりならば」とソルスティンは言った、
「彼がこんなにもお前をほめそやすからには、そうせざるを得ないな」

するとブロッディは立ちあがり、多くの者も彼と同じようにした。かれは小屋から出ていった。
その時かれはオルコヴリと二人だけで話しあった。

その後かれらは〔民会〕広原にあがって行った。そこには多数の者たちがいた。人々はこのとき裁判に参加していたのだった。しかし、他の者たちが立ち去ってしまうと、グズムンドとスカプティが残って、法律について話をしていた。ブロッディとその仲間は広原をぶらぶら歩いていたが、オルコヴリは裁判の開かれた場所に向っていった。かれは身体のかぎり這いつくばり、二人の足もとまで這って行って言った、「立派なお人でわしの首領であるお二人に会えたとはありがたいことです。親切な方々、わしはそんな値うちはないのですが、わしを助けてはいただけませんか。と言いますのも、お助けいただかないと、わしは全く船から投げすてられたも同然になりますので」

オルコヴリの言葉、かれが語ったことばを残らず数えあげれば暇どってしまうが、彼はあらゆる点でできるだけ哀れっぽくした。その時グズムンドがスカプティに言った、「この男の様子はひどく惨めだな」

スカプティは答える、「オルコヴリよ、おまえの思い上りはどこに行ってしまったのだ。おまえはこの春、わしらが召喚に出かけたとき、問題をわしに任せるのがお前にとって最上の方策だとは思わなかったではないか。おまえが春に支持を得られると言ってわしを脅した首領たちがおまえを助けるのは、今はひどくむづかしくなっているではないか」

オルコヴリは言う、「あの時わしは変だったのです。その上、あなたがわしの件について裁くことを望まなかった時はもっとおかしかったのです。それから、どうぞ首領たちのことは言わないで下さい。あの人たちはお二人が来るのを見れば、おじけづくでしょうから。わしの件をお二人にお任せできたら、わしは嬉しいのです。だが、わしはその期待が持てるでしょうか。スカプティさん、あなたがわしにとっても腹を立てて、それが無理なことはご尤もです。あなたの裁きを拒んだとき、わしは馬鹿のあほうでしたが、お二人が助けてくれなければ、すぐにもわしを殺そうとするあの恐い人たちにわしはとても会うことができません」

かれは同じことを繰返して言って、二人が自分の件を裁くならば自分はいれしく思うと語った、
「お二人がわしの財産を持っていれば、それは一番しっかりした人の手に任されるというものでしょう」

グズムンドがスカプティに言った、「わしは、この男が処罰に値するとは思わない。それよりも、わしらは彼をよろこばしてやって、彼にこの裁きのために人を選ばせる方が得策ではないか。だが、この件でかれと関係している他の者たちがそれを気に入るかどうか、わしには分らないが」

「それでは、立派な方々」とオルコヴリは言う、「後でわしに援助をしてください」

スカプティは言った、「この問題の結末はわしの手の中にある。というのは、わしがこの訴訟を扱っているからだ。オルコヴリよ、いちかばちか、グズムンドとわしはこの件を調停して結着をつけてみよう。わしらの援助でおまえにとってはよくなるだろうよ」

その時オルコヴリは立ちあがり、それから彼らは握手をした。オルコヴリはすぐに証人の名を次々にあげ、証人の指名が始まると、ひとが寄り集まってきた。オルコヴリは先ずブロッディとその仲間を名指した。スカプティは言った、「わしらの相手はグズムンドとわしはこの件について裁きを頼んでいる。被害をうけているわしらの間では一方的裁断が行われるべきだということまでまとまっているけれども、グズムンドとわしの二人は今、ソールハッル [=オルコヴリ] がその決定に賛成する気があれば、他の者でなくてわしら二人が裁きをするという風にしてオルコヴリを助けたいと思っている。皆の衆は、この件には罰金が払われて実刑が課されないことの証人に指名される。わしは握手をすることによって、春に起した訴訟事件を取りさげることを確認する」

それから彼らは[同意の]握手をし終った。その時スカプティがグズムンドに言った、「どうして、わしら二人がこれに結着をつけることは悪だろう」

「よかろう」とグズムンドは言う。

オルコヴリは言った、「お二人はそのことをそんなにせいては駄目です。わしは、他の人ではなくてあなた方二人を選ぶとは決めていないのですから」

グズムンドが言った、「わしらと一緒にこの件に関係している他の者たちの方をおまえが選ぶのでなければ、わしらが裁くというように了解したはずだったが」

オルコヴリは言う、「あの人たちが裁くということには、わしはずっと反対していました。しかし、握手で決ったことは、わしが自分で考える二人のひとを選ぶのだと了解されたはずです」

そこで、握手の時の証人が探されたが、グズムンドとスカプティのスィングメン⁽³⁾は、どのように了解されたかということについて大いに意見を異にした。ブロッディとその仲間は、オルコヴリが裁きのための人を自分で選ぶものと了解したと、はっきり言った。

するとスカプティが言った、「オルコヴリよ、この波はどこからうねってきたのだ。おまえが少しまえよりも尻尾を少々ピーンとはっているのが分るぞ。だが、おまえはどんな者らを裁きのために選ぶのだ」

オルコヴリは言った、「それは長く考えることもありません。ソルステイン・ハルムソンとその身内のブロッディ・ビャルナソンを選びます。そうすれば、この問題は、あなたたちが裁くときよりも有利になると思います」

スカプティは、かれらが裁いてもその問題は有利になると思うと言った——「と言うのも、訴訟事実は明白で正当なのだからな。そして、かれらは賢く、おまえの価値がどれだけの重さのものか見分けることが出来るほどだ」

すると、オルコヴリはブロッディの一行の中に入っていき、人々は小屋に戻っていった。

III. その日おそくに仲裁判断が宣言されることとなった。そのときソルステインとブロッディは協議した。ソルステインは罰金をもっと科そうとした。しかし、ブロッディは、自分のおもい通りにすること、そして自分が仲裁判断を宣告することは明々白々だと言った。ブロッディは、仲裁判断を宣言するか、あるいは誰かが仲裁判断を非難することを言い出したらそれに応答するか、いずれか望む方を択るようにとソルステインに言った。ソルステインは、自分はそのゴズィたちと罵りのことばを交すよりはむしろ仲裁判断を宣言したいと、はっきり言った。それからソルステインは、オルコヴリが長いこと自分の負担分を先にのばす必要はないと言って、罰金はこのらず法の岩で支払われるものとすると言った。その後かれらは法の岩にいった。そして、[他の] 法廷作業が述べられ終ると、ソルステイン・ハッルゥソンは、オルコヴリに対して訴え事をもっているゴズィたちが法の岩に来ているかどうか尋ねた。「わしは、ブロッディとわしの二人がその件について裁くように言われている。もしあなた方が耳を傾けるつもりならば、わしら二人はいま裁きを言い渡そう」

かれらは、二人が裁きで公正であることを期待すると言った。そこでソルステインは言った、「わしらには、あなた方仲間の林は大した値打ちがあると思えない。余り価値がなく、あなた方には利用するのに場所も遠い。財産にこと欠かないのに、この林を自分の他の所有物と同等視する者たちははなはだ利己的である。一方オルコヴリは、自分の林を焼いたときに、あなた方の林に責任を負えなかった。それ故これは過失行為であるが、仲裁に委ねられているため、幾分かの過料金を課することにする。あなた方六名はその林を所有していた。わしらはあなた方それぞれに六エル⁽¹⁾を定め、それは直ちにこの場で支払われるものとする」

ブロッディはホームスパンをすでにはかって切っていて、切れはしを一つ一つ彼らに投げてやって言った、「こんなのを恥知らずな取り分と云うもんだ」

スカプティが言う、「ブロッディよ、おまえがわたしたちと不仲になりたがっているのは、火をみるよりも明らかだ。おまえはこの件に余計なちょっかいを出してきて、わしらを敵にまわすことを全く嫌わないのだな。わしらには、他の事件の方がずっと楽だったろう」

ブロッディは答える、「スカプティさん、あなたが身内のオルムの奥さんについて作ったくどきの詩のために彼があんたから巻きあげた分の穴うめをしなきゃならないのならば、あんたは他の訴訟事件でもっと沢山とる必要があるってわけだ。あの詩は出来が悪かったし、それで報酬もよくなかった⁽²⁾」

すると〈ひだ飾り〉ソルケルが言った、「今のブロッディのような男には、物事はとてもひどく曲って見えるのだ。かれはオルコヴリのいろいろの贈物と支払いを欲しがっているが、そうして自分自身は、いま相手にしているような人物たちの敵になるのだ」

ブロッディは言う、「あんたたちとオルコヴリの間には人物としての違いがあったとしても、

自分の信義を守ることを見当ちがいではない。だが、春のあれ、あんたが春期民会に出かけたときのあれは、へまそのもんだったな。ステイングリームがあざらしのように肥えた種馬をもっていて、そいつがあんたの背中に乗ったが、あんたの乗っていた雌馬はやせっぽで、あんたを乗せたまま倒れたのに、あんたが気づかなかったことさ。あの時どんな風にしてあんたが這い出したか、本当のところを聞いていないが、馬が頭巾つきの外套に足をのせたままだったのであんたが長いこと動きがとれずにいたのは、みんなが見ていた⁽³⁾」

エイヨールヴ・ソールザルソンが言った、「本当のことを言って、この男はひどくわしらの鼻毛を抜いてしまった。その上このままにしておいては、ラーン⁽⁴⁾と[アースの]神々から責められるぞ」

ブロッディは言う、「おれはあんたの鼻毛など抜いてはいない。しかし、あんたが北のスカガフィヨルドに行ってソルケル・エイリークソンから牡牛どもを盗んだが、グズダラ＝スタッリがあんたの後を追ってきて、あんたらがヴァトンスダルまでやって来た時にあんたがその追跡の一行を目にしたとき、あんたの鼻毛は抜かれたのさ。あの時あんたはひどく恐れて雌馬に姿をかえたほどだった。あのようなのは、ひどい醜態というもんだ。スタッリたちの方は、牡牛どもを奪い返していった。だから、彼があんたの鼻毛を抜いたのは本当だ⁽⁵⁾」

するとスノッリ〈ゴズィ〉が言った、「わしらにとって、ここでブロッディと口争いするよりも他のことの方がもっとふさわしいが、一番いいのは、もし攻撃の機会があるならば[復讐するように]、ブロッディがわしらに見せている敵意を忘れずにおくことだ」

ブロッディは言う、「スノッリさん、もしあんたがおれに復讐することを本当に心がけるのならば、あんたは名誉を前後させるわけだ。あんたは自分の父親の仇を討っていないではないか⁽⁶⁾」

するとソルケル・ゲイティッソンが言った、「真先に考えられることだが、お前は名前をもらった者からその性格を受けついで、彼がいつもそうだったように、みんなの事柄について悪意を持ちたがり、そして第二に、それは他人から我慢されず、時がたてばお前は殺されてしまうだろう⁽⁷⁾」

ブロッディは言う、「いとこ、おれたち身内の不運をここで皆なにさらけ出すのは、おれたちにとって何の名誉にもならない。だが、多くの者も知っている、ブロッド＝ヘルギが殺されたということは隠しはしない。その報いをあんたの親爺さんがたっぷり受けた⁽⁸⁾とおれも聞いているし、もしあんたがそうしてみるならば、おれの親爺がボズヴァルスダルであんたに印をつけた⁽⁹⁾ものをあんたは指で触ってみることができるだろうな」

その後、かれらは別れて小屋に戻っていた。いまやオルコヴリは物語から消える。^{サガ}

IV. 2日後、ブロッディはソルケル・ゲイティッソンの小屋に行き、小屋の中に入ってソルケルに言葉をかけた。彼はろくに返答もせず、ひどく腹をたてていた。ブロッディは言った、「親類、おれはあんたに言ったことに間違いがあったと分ったのでやって来たんだよ。あれは、わし

の青くささと愚かさだと考えてくれるように頼みたい。でも、おれたちの親戚関係はこれ以上悪くさせないようにしよう。おれがあんたに取ってもらいたい剣が飾り細工してここにある。その上おれは、あんたに夏おれのところの振舞いに来てもらいたいし、あんたが受けとる宝物よりもいいのをおれ自身が所有しはしないとはっきり言える」

ソルケルはこれをありがたく受け、自分は二人が自分たちの親戚関係をよくしたらと思っていると言った。そうして、ブロッディは戻っていった。

民会終了の前夜のこと、ブロッディは川の西側に渡っていったが、橋の末端でかれとグズムンドとが出くわし、挨拶はされなかった。二人が別れるとき、グズムンドが振りむいて言った、「ブロッディ、民会からどの道を帰るのだ」

かれは振り返って言った、「あんたがそれを知りたいと言うのなら[話すが]、おれはキョル⁽¹⁾を越えてスカガフィヨルド⁽²⁾に行き、そしてエイヤフィヨルド⁽³⁾に、そこからリョーサヴァトン狭間⁽⁴⁾に、そしてミューヴァトン⁽⁵⁾に、それからモズルダル荒原⁽⁶⁾に行く」

グズムンドが言った、「言ったことを守って、リョーサヴァトン狭間を通れよ」

ブロッディは言う、「それは守るとも。だがグズムンドさん、あんたはおれに対して狭間を防ぐつもりか。もしあんたが、おれが仲間とそこを行けないように、おれに対してリョーサヴァトン狭間を防ぐんなら、それはやることが裏目に出るというもんだ。しかしあんたは、あんたの両太股の間にある狭間を、非難されることのないようには守れはしないさ」

こうして二人は別れ、この遣りとりは民会中に拡まった。しかし、ソルケル・ゲイティッソンはこれを知るとブロッディに会いに行き、かれにサンド山道⁽⁷⁾に行くか東部に行くように言った⁽⁸⁾。

ブロッディは言う、「おれは自分がグズムンドに話した道に行く。もしそう行かなければ、連中はおれを臆病者呼ばわりするだろうからな」

ソルケルが言った、「親類、その時はわしら二人いっしょに行こう。そしてわしらの小人数の一行もな」

ブロッディは、かれの同行を名誉に思うと言い、また喜んでそうしたいと言い切った。

その後、ソルケルとブロッディはそろって自分の一行をともなって北に向ってエクснаダル荒原⁽⁹⁾を行った。かれらの外、ソルケルの身内のエイヨールヴの息子エイナル⁽¹⁰⁾がこの同じ一行の中にいた。ブロッディとソルケルはエイナルと一緒にスヴェラー⁽¹¹⁾に行き、夜はそこに泊った。それからエイナルは大勢をつれて彼らに同行し、かれらはスキャールヴァンディ川⁽¹²⁾の近くでようやく別れた。その時エイナルは家に戻ったが、ソルケルとブロッディの方は東のヴァブナフィヨルド⁽¹³⁾の自分の屋敷に着くまで旅足を止めなかった。その夏、ソルケルは身内ブロッディの振舞いに出かけたが、そこで彼は極上の贈物を貰った。そのころ二人は友情のあるきわめて親しい親戚関係を持ち、これは彼らが生きている間つづいた。そして、そこでオルコヴリ^{サガ}の物語は終る。

1. Bláskógar Ölfusvatn (「オルヴス湖」, 現在の南西アイスランドの県 Árneyssýsla にある Þingvallavatn「民会広原湖」のこと)の北, 西, 南側を囲む一帯を指した。この地域にかつては黒っぽい濃緑の樺の繁みがあったために, こう名付けられたもの。ここは, Ari inn fróði Þorgilsson: *Íslendingabók* (= Íslensk fornrit I, Reykjavík 1968), ch. 3 によれば, 930 年頃に大民会 Alþingi が設置されるまでは〈刈込み髭〉ソーリル Þórir kroppinskeggi の所有地であったが, 彼が殺人罪で追放刑に処せられて後, 公有地 (allherjarfé) となり, 大民会の恒久的な開催場所とされ, そこの林や牧草地は共同使用されたものである。
2. 本文では〈ビール〉を指す語として *öl* と *munǵát* のふたつが用いられている。古ノルド語文献では更に, *bjórr* も〈ビール〉を意味する。*öl* (<Gmc **alup*; cf. OSax. *alo* (-*fat*), ODan. *ól*, E *ale*) はビール類の総称であり, またより古くは酩酊性を有する飲料をひろく指すのに使われたようである。*munǵát* (←*munr* m. 'mind, delight, love' + *gát* n. 'dainty'; Dan. *mundgodt*) は本来「美味な飲料」を表わす合成語であったろうが, 一般に, 自家製ないしは国内産の, 特にアルコール分の少ないビール (Sw. *lättöl*) を指す。一方, *bjórr* (<OE *béor* < Gmc **beura-*, **beuza-*; cf. OHG *bior*, G *Bier*) は, 主として英独の諸外国から輸入されたビールを意味するのに用いられた。エッダ詩では, 〈ビール〉は次のように命名されている。*Öl heitir með mǫnnum, / en með ásom bjórr, / kalla veig vanir, / hreinalög iǫtnar, . . .*「人間のもとでは *öl* と, アース神のもとでは *bjórr* と称し, ヴァン神は *veig*〈強い飲料〉と, 巨人どもは *hreinalög*〈純粋の液体〉と呼ぶなり」(Alvíssmál 34)。
なお, 中世北欧における醸造法, アルコール販売等については, たとえば Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder II (København etc. 1957) 所収項目 *Brygging, Brygggestol* を参照。
3. Hrafnabjörg 民会広原湖の北, ここを流れる川 Öxará の東にある。
4. Langahlíð 他の文献には現われず, 正確な位置づけも不明。今日の Hlíðargjá 西端の Raftahlíð か (cf. ÍF XI, 1950, p. 84, fn. 4)。なお, 今日この名の山地が民会広原湖の西にある。
5. 木炭製造法については, ここの外に, *Brennu-Njáls saga* (ÍF XII, 1954) cf. 38, *Eyrbyggja saga* (ÍF IV, 1935) ch. 26 などにも記述がある。この製造法は, 19世紀後半まで行われていた。
6. Goðaskógr 外には, *Grettis saga Ásmundarsonar* (ÍF VII, 1936) ch. 32 [= 筑摩書房 世界文学大系66『中世文学集』(昭和41年)所収, 松谷健二訳「グレイティルのサガ」31章]に出ているだけ。*goða-* は, *goði* m.「ゴズィ」の外, *goð* n.「異教神」の複数属格であるので, この名は「神々の林」とも訳し得る。
7. Snorri goði Þorgrímsson (963/4-1031) 中西部アイスランド Snæfellsnessýsla の中北部 Helgafell の「賢明できわめて進取的な」(*Njáls s.* ch. 119) 豪族であるが, 伝説的なほどに慎重で狡知の人物。長篇サガ *Eyrbyggja s.*, *Laxdæla saga* (ÍF V, 1934) の主要人物であり, *Heiðarviga saga* (ÍF III, 1938) などにも叙述されている。彼が大民会参加の際に滞在した仮屋 (Snorrabúð) は〈法の岩〉のそばにあったと言われている (Jón Jóhannesson: *Íslands historie. I: Mellomalderen, oversatt av H. Magerøy, Oslo-Bergen-Tromsø 1969, p. 37*)。なお *goði* については, 本学報 No. 21, 1969, p. 139, note 3 を参照。
8. Guðmundr inn ríki Eyjólfsson (954/5-1025) Eyjafjörður 北部を所有した入植者 Helgi inn magri Eyvindarson の孫の孫で (cf. *Íslendingabók*, *Ættartala*), 中北部 Eyjafjarðarsýsla の Möðruvellir の豪族。〈権力者〉と純名された人物だが, その前半で主要な役割を与えられている *Ljósvetninga saga* (ÍF X, 1940) では, きわめて否定的な人格に描写されている。多数のサガ, たとえば *Njáls s.*, *Grettis s.*, *Valla-Ljóts saga* (ÍF IX, 1956), *Viga-Glúms saga* (ÍF IX), *Vatnsdæla saga* (ÍF VIII, 1939) に登場。スノリ〈ゴズィ〉や, 後出ソルケル・ゲイティッソンとは姻戚関係, エイナル・エイヨールヴソンとは兄弟になる。彼はまた, アイスランド初期の大学者とされている Sæmundr inn fróði Sigfússon (1054-1133) の母 Þórey Eyjólfsdóttir の祖父でもある (cf. *Landnámabók*: ÍF I, p. 229)。

9. Skapti logsögumaðr Þóroddsson (d. 1030) Árnessýsla 西南部の平野 Ölfus の Hjalli に住んだ豪族。〈法の宣言者〉を9期もつとめたり(1004—30年), 法律のスカプティ(Log-Skapti)とも呼ばれたように, 法律に精通し, キリスト教採用(1000年)直後の権威者として「第五裁判所法(Fimmtardómslög)と, 被害者は自分自身以外の者を殺人行為(víg)で告訴すべきでないことを定めた」(Íslendingabók ch. 8), cf. 本学報 No. 31, 1974, p. 92, note 6. *Njáls s.*, *Óláfs saga helga* (ÍF XXVII, 1945), *Gunnlaugs saga ormstungu* (ÍF III: 本学報 Nos. 27, 31 に拙訳あり)等のサガにも叙述されている。なお彼は, アイスランド人初代のカトリック司教 Ísleifr Gizursson (1005/06-80; 在任1056-80)の母方の伯父。
10. Þorkell Geitisson 東北アイスランド Norður-Múlasýsla 中北部の Krossavík inn ytri に住み, 父親の殺害にともなって987年ゴズィになった(cf. ÍF X, p. LIV; p. 101, fn. 3; 後出注 III, 8)。前出グズムンドやスノッリ, また後出ブロッディと, 親戚の間柄である。*Vápnfirðinga saga*, *Droplaugarsona saga*, *Fljótsdæla saga*, *Gunnars þáttir Þiðrandabana* (以上すべて ÍF XI, 1950), *Njáls s.*, *Ljósvetninga s.* など多くのサガに登場。
11. Eyjólfur inn grái Þórðarson gellis 西北アイスランド Barðastrandarsýsla の Ortradalr の豪族で, きわめて美男で法律に精通していた(cf. *Njáls s.*, ch. 138)ようだが, もっとも一般には, Gísli Súrsson を殺した悪役で知られている(cf. *Gisla s.*, *Laxdæla s.*, *Eyrbyggja s.* にも彼の名が出ている。彼はスノッリの祖母の甥であり, また実証主義的修史家アリの曾祖父の祖父(cf. *Íslendingabók*, *Ættartala*)。
12. Þorkell trefill Rauða-Bjarnason 南西アイスランド Mýrasýsla の Svignaskarð に住んだ賢明で人望厚い裕福な豪族で(cf. *Hænsa-þóris saga*: ÍF III; 山室静『赤毛のエリク記』所収「めんどりのトールルのサガ」, ch. 1; *Laxdæla s.*, ch. 10), Þórdís Þorsteinsdóttir の夫としてスノッリの身内であった。なお, trefill m. は, (1)「フリル布などの縁への飾り」(現代語の意味「スカーフ」参照)とならんで, (2)「ぼろ」をも意味する。
13. 注1に挙げたアリの記述と矛盾するように思われる。しかしながら, ゴズィの, 事実上無制限の権力行使を考えると, かれらが横暴にも公有地の一部を利己的, 独占的に使用したであろうことは, 必ずしも否定できないだろう。
14. stefnudagr この法律用語は, (1)裁判が開かれ, 召喚を受けた者がこれに出席せねばならない日, (2)裁判への召喚を通告する日, のいずれかを意味する。本文では第二の意味に用いられている。
15. skóggangr 共同社会からの完全な追放で, 当時のアイスランドにおける最高刑。くわしくは, 本学報 No. 22, p. 131 f., note 3 を参照。
16. sjálfðæmi 当事者の一方が独断的に裁定すること。本学報 No. 22, p. 135, note 5 をも参照。
17. birnu beitask 「危険な争いにわざわざ手を出す, 火中の栗を拾う」の意の陰喩。
18. Þorsteinn Síðu-Hallsson (994-1051) 東アイスランド Álftafjörður (Suður-Múlasýsla) の Hof の豪族で, ヴィーキングとして, オークニー公 Sigurðr Hlqðvisson と共にブリテン諸島に遠征し, Brjánsor-rosta (アイルランド王 Brian Borumha に挑んだ Battle of Clontarf, 1014年4月23日)にも参加し, またノルウェー王 Magnús Ólafsson に仕えた(1035-47年)。くわしくは, *Þorsteins saga Síðu-Hallssonar* (ÍF XI) を参照。かれの妻は, ブロッディの姉妹 Yngvildr (cf. ÍF I, p. 290 ff.). 彼の父 Hallr Þorsteinson は, キリスト教改宗者のはじめの一人。

II.

1. Broddi Bjarnason 東北東アイスランド Vopnafjörður (Norður-Múlasýsla) の Hof に住んだ豪族で, 「多くの所でサガに登場し, かれの時代でもっとも傑出した人物であった」(*Þorsteins saga stangarhoggss*: ÍF XI, p. 78)といわれるが, 彼は外に *Bandamanna saga* (ÍF VII) や *Ljósvetninga s.* でも主要人物の一人として出ている。
2. klengisösk 法律用語であるが, 辞典等では以下のように解釈されている。(a) 'picking up a quarrel'

(Cleasby, Vigfusson & Craigie: *An Icelandic-English Dictionary*, Oxford, 2nd ed. 1957), (b)「単に他人に害を与えるとか自己の利益を図るために、十分な根拠もなく他人に無理強いする問題」(J. Fritzner: *Ordbog over det gamle norske Sprog*, Oslo-Bergen-Tromsø, 4. Udg. 1973), 「でっちあげ」(c) 'tyllisök' 「些細な問題」, cf. *klengjask* 「不正に(他人のものを)欲しがる」(ÍF XI, p. 87, fn. 1).

3. *þingmenn* (sing. *þingmaðr*). Cf. 本学報 No. 21, p. 132, notes 3, 5.

III.

1. *sex álnar* ホームスパンの価値で、牝牛1頭の12分の1から20分の1に相当するとされている(ÍF XI, p. 90, fn. 4). したがって、この過料金は合わせて牝牛半頭分以下にしかならない。
2. この事件は他所から傍証され得ない。なおスカプティは、ノルウェーの支配者 Hákon jarl inn ríki と Óláfr inn helgi の詩人の中に挙げられている (cf. *Skáldatal in Edda Snorra Sturlusonar*. Guðni Jónsson bjó til prentunar, 4. bindi, Akureyri 1954, pp. 348, 343). しかし、彼の実作はほとんど現存していない。また、スカプティの身内とされる Ormr については未詳。
3. これも他所から傍証できない事件。Steingrímur は未詳の人物。
4. Rán 海神 Ægir の妻 (エッダ詩 *Helgakviða Hjörvarðssonar* 18, *Reginsmál* 冒頭散文)。
5. これもまた他所から傍証し得ない事件。Guðdala-Starri は、〈決闘の〉スタッリ (*Hólmgonngu-Starri*) と綽名され、Guðdalir 一帯を開いた植民者 Eiríkr Hróaldsson (cf. ÍF I, p. 231; *Njáls s.*, chs. 119, 134; *Grettis s.*, ch. 70) の息子で、Skagafjörður の Hof に住んでいた。Þorkell Eiríksson は彼の長兄であり、他の兄 Þorgeirr はブロッディの祖父。
6. スノッリは同様の非難を、*Njáls s.* 後半のヒーローの一人 Skarpheðinn から受けており、おそらく同サガの作者はこの物語を知っていたのであろう (cf. ÍF XI, p. 93, fn 4). スノッリはその非難を「多くの者が以前にそう言っておるし、わしはそんなことに腹は立てんだろう」(*Njáls s.*, ch. 119) と軽くあしらっている。彼の父 Þorgrímur Þorgrímsson/Þorsteinsson (938-963/4) はスノッリの生まれた年に Sæból (北西アイスランド Ömundarfjörður) で義弟 Gísli Súrsson (d. 978/9) によって就寝中を殺された (cf. *Gísla s.*, ch. 16; *Eyrbyggja s.*, ch. 12). なお、ギースリはスノッリが15歳の年に殺された (cf. *Eyrbyggja s.*, Ævi Snorra goða; 上記注 I, 11).
7. 祖先や故人の幸運や才能に与えられるようにと、その者の名を新生児につける習慣は、古来ひろく諸民族に認められている。アイスランド人の間では、ふつう孫息子(しばしば長男)が祖父の名を考えられている。10-11世紀には、親族の綽名を新生児に名づけることが、きわめて普通であった。たとえば、この物語に出ている名でも、Skapti は祖母 Þorvör の父 Þormóður skapti 〈槍の柄〉Óleifsson に因んで名づけられ、Þórðr gellir 〈大吠え〉は、子孫の Gellir Þolverksson lögsgumaðr や Gellir Þorkelsson にその名を受けつがれている。ここでソルケル・ゲイティッソンが指しているのは、ブロッディの父方の祖父 Brodd-Helgi 〈鉄釘のヘルギ〉Þorgilsson. なお、ブロッディの最期は不明。
8. ソルケルの父ゲイティルとブロード=ヘルギの争い、その結果後者が殺害される(974年)顛末は、*Vápnfirðinga saga* に詳しい。ビャルニのゲイティル殺し(987)については、同サガ14章に物語られている。
9. Þoðvalsdalr の Eyvindarstaðir 付近でビャルニとソルケルとが衝突し(989年)、前者に後者が手を傷つけられて闘えなくなったが(*Vápnfirðinga s.*, ch. 18), 両者は最後に和解する (Ibid., ch. 19; cf. *Vöðu-Brands þáttr*, ch. 5).

IV.

1. Kjalr 現代語表記では Kjöllur (「竜骨」の意)。アイスランド中西部、民会広原の北々東に当り、氷河 Langjökull と Hofsjökull の間にある山地。高最峰は Kjalfell (1000 m)。
2. Skagafjörðr 北部アイスランドの平野で、同名の湾に面する(今日の Skagafjarðarsýsla)。

3. Eyjafjörðr Skagafjörður のほぼ真東にある平野で、同名の湾に面する (Eyjafjarðarsýsla).
4. Ljósavatnsskarð Eyjafjörður の北々東にある平野 (Suðurþingeyjarsýsla).
5. Mývatn Ljósavatnsskarð の南東にあるアイスランド最大の湖。
6. Mòðrudalsheiðr 北東アイスランド Axarfjörður に注ぐ川 Jökulsá á Fjöllum の上流東部にある (Norður-Múlasýsla).
7. Sandleið Langjökull や Kjölur の南方を通り、これらの東にある氷河 Hofsjökull の東北を通った北部地方への間道。
8. この民会広原と北部地方との間の連絡路については、*Hrafnkels saga*, ch. 8 をも見よ。
9. Óxnadalshéiðr Eyjafjörður の西、平野 Óxnadalur の南西にある (Skagafjarðarsýsla).
10. Einarr Þveræingr Eyjólfsson Þverá の「きわめて賢明な」(*Ljósvetninga s.*, ch. 5) 豪族で、グズムンドの兄、ソルケル・ゲイティッソンの義父、そしてブロッディの妻の祖父。
11. Þverá Mývatn の北々西の平野 Laxárdalur にある農場 (Suðurþingeyjarsýsla).
12. Skálfandafljót Þverá の西を南北に流れ Skálfandi 湾に注ぐ (Suðurþingeyjarsýsla).
13. Vápnafjörðr 北東アイスランドにある同名の湾に面する地域 (Norður-Múlasýsla).